



## 酋長の贈り物

### 酋長の贈り物

---

あの日、倒れた柱の下敷きになった人を、自分も背中や足から血を流しながら、必死に助け出そうとしている人がいた。マリア、それが君のお父さんだ。

マリアさん。でもお父さんはここで沢山の家族を作ったわ。震災で親や子を無くした人を集めて新しい家族を作った。

それは嘘の家族でも、父や母や息子や娘と言いつつに本当の家族になれる。お父さんはいつもそう言っていた。だからみんなから酋長と言われていたんじゃない。

阪神大震災。未曾有の災害の中で引き裂かれた家族、作られた家族。不良少女のマリアは、仮設住宅で長年離れ離れになっていた父親と出会ったが・・・

神戸の町を舞台に、家族とは何かを問い掛ける掌編戯曲。

「酋長の贈り物」

人物

マリア 女 二十歳  
桜 女 二十歳  
田中 男 二十六歳、市の福祉課職員  
取立屋 男 三十歳、サラ金の取立屋  
牧師 男 五十歳

高橋（酋長） 男 六十歳、舞台には登場しない

第一場

阪神大震災から六年目のクリスマスの近いある日、震災地の一角に僅かに残った仮設住宅の町の、その町外れに小さな教会がある。

舞台は教会の中で、正面に窓があり、窓の下に聖母子の像がある。客席に向かって教会の椅子が二つ、右と左に置かれている。

マリアと田中が右の椅子に並んで座り、片方の椅子に牧師が座っている。

田中 この町の仮設住宅もみんな出て行きはって残っている人は少のうなつたな。もうあの震災から六年やもんな。

牧師 でも、残っている人は身寄りのない人が多くなってこれからが大変でしょう。

田中 そうなんですけどね。そろそろ市のほうではこのあたりの再開発を考えようという声が出ているんです。

マリア うちは出えへんで。一生ここに住むつもりや。

田中 牧師はん、この子は教会のほうで引き取ってもらおう訳にはいきまへんか。名前もマリアで教会にびったりやし。

牧師 マリアさん。貴方のお父さんは本当に美しい名前を貴方に贈ってくれましたね。

田中 いや、おかしな名前をつけたもんや。あの人は・

。。  
マリアがはつとしたように田中と牧師を見る。下手から黒メガネの取立屋が登場、牧師の座っている椅子を乱暴に蹴飛ばすが、椅子が大きく重いので、足のほうを傷めてしまつて思わず飛び上がる。

取立屋 (三人を睨んで) 高橋の親父はどこや。

田中 な、なんや、あんたは。

マリア こいつはサラ金の取立屋や。この間も来てたわ。

(取立屋に) 酋長やつたら居てへんで。

取立屋 酋長て何や。

マリア このへんではみんな高橋のおっちゃんのこと酋長て呼んでるんよ。まあ、会長みたいなもんやな。

取立屋 (すぐみをきかせるように) 酋長か村長か知らんけど、嘘ゆつたら承知せえへんで。ちゃんとそこで、高橋の親父は天国へ行つたて聞いてきたんや。天国ゆつたら教会のことやる。

牧師 高橋さんは昨日天国に行かれました。主の元に行かれたのです。

取立屋 だから天国のどこにおるんやて聞いてるんや

田中 だから酋長は亡くなつたていうてるんや。

取立屋 (驚いて黒メガネを外しながら牧師の隣に腰を下ろして) え、ほんまか。何でや。騎兵隊に撃たれたんか。

マリア お前が脅したからや。

取立屋 何ゆうつんね。ちゃんとした営業行為やんけ。そやけどやつぱり、あの猫の死体はきつかったかな。俺もやりすぎかなと思たんや。

マリア これのこと。(といいながら猫のぬいぐるみをポーンと取立屋に放る)

取立屋 ウヒャー。(ぬいぐるみをつかむが驚いて今度は田中に放る。すると田中が驚いてマリアに放る)

マリア これ酋長の家の玄関で首つとつたで。猫のぬいぐるみの首つりて何のまじないや

取立屋 ほんまはな、本物の猫の死体を嫌がらせに吊らなあかんねやけど、おれ死体苦手やからな。

マリア なさけない取立屋やな。こんなもんで誰が怖がるかいな。

牧師 高橋はんは昨日の朝、突然の心臓マヒで急に亡くな

ったんです。本当に元気な方だったのに、私たちの知らないところで何か無理をなさっていたのかもしれない。

田中 それで、取立屋はん。高橋さんはいったいいくらぐらい借りてはったんですか。

取立屋 あんたが返してくれるんかいな。

田中 いえね、私はこの人たちのお世話をさせてもろてるんで、一応みなさんのことは知つとかんとあかんのですわ。

取立屋 百万円

牧師、田中、マリア え、そんなに沢山

三人が立ち上がって舞台中央に集まる。

牧師 高橋さんがそんなにお金に困ってたなんて気がつきませんでした。何に遭われたんでしょう。

取立屋 そんな、女が博打できまつてるやる。

田中 でも、もう亡くなつたんですから、何もわかりませんね。

マリア な、そういうわけや。酋長は死んだんやから借金もない。みんなチャラ（取立屋に）あんた縁がなかったね。サイナラや。

取立屋（立上がり舞台中央に出て）そうはいかんなあ。

本人が死んだかて代理人に返して貰うわい。そのために家族ちゆうもんがあるんや。たしか子供がいたはずやな。

牧師 いいえ、高橋さんはあの震災で家族の方をみんな亡くされて誰も身寄りはおられないんです。このあたりのお年寄りはその不幸な方ばかりですよ。

田中とマリアがこつそり顔を見合わず。下手から桜が登場する

マリア あ、桜さん、まだいてたん。

桜 私たちに払わせてください。今そこで聞いていたんですけど、お父さんに受けた恩に比べたら安いものですわ。何年かかかるかわからないけど、お兄ちゃんと二人で働いてきつとお返ししますわ。

マリア あほらし。こんな奴の言うことなんか本気にせんでええんよ。なあ牧師さん。キリストさんかてそういうてはるわな。金貸しは汚い商売やて。

牧師が中央に進んで正面を向き、礼拝の時の説教の  
よつに話す。

牧師 エルサレムの神殿で金貸しを商いとする者たちにご  
う言われました。(取立屋に)ここは神の家である。お  
前たちのような卑しきものの居る場所ではない。

田中 キリストを裏切ったユダは金貸しやった。

牧師 また、このように言われました。金貸しによりて財を  
なしたるものよ。お前たちに天国の門は狭く、入るのは  
困難である。それはラクダの針の穴をくぐるが如し。

取立屋 そやけど、なんぼキリストさんかて借りたものを  
返さんでもええて、そんな無茶はいわんやろ。

牧師 โรมາのものはโรมາに、神の物は神に返

取立屋 そら見てみ。サラ金に借りた金はサラ金に返せ。

マリア もう頼りない牧師さんやな。こんな奴の調子に乗  
せられて。

取立屋 お前らはどうでもええんや。やっぱりちゃんと子  
供が二人いてるんやんけ。

牧師 え、子供が二人もあるんですか。

取立屋 (桜を指さし)兄貴がいるんやろ。

田中 いえ、この人たちは…(あとを言おうとするが取立  
屋が遮ってしまう)

取立屋 (桜に)それで、あんたの兄貴は市の福祉課に勤  
めているというわけやな。

桜 いいえ、お兄ちゃんは大阪のほうの工場で働いてい  
るんです。

取立屋 それは、おかしいなあ。うちのほうの調査では、  
兄貴は市の福祉課職員となってるんやけどなあ。

牧師 (田中を見ながら)市の福祉課?

桜 市の福祉課といえは田中さんがそつだけど

田中が顔をそらして、舞台の奥へいく。

牧師 それで、妹のほうは。

取立屋 それが、妹のほうはようわからんや。名前は何  
でもキリストの母親と同じやていうんやけどな。

牧師 (驚いて、壁の聖母マリアを見上げ)え、あの人と  
同じ名前。

桜 マリア……。妹の名前はマリア。(マリアを見つめて

( マリアさんなの。)

牧師 マリア。君はもしかして……。

マリアがしばらく俯いていたが、突然顔をあげて

マリア そうよ。うちが酋長の子供のマリアよ。そして、市の福祉課の田中さんはうちのたった一人のお兄さんというわけ。二人とも母親はちがうけどね。

取立屋 なにー。なにがどうしてどうなってるねん。

## 第二場

その夜の高橋の家。小さな書棚が置いてあり、中央に小さな一人暮らしのテーブル、その回りにテーブルを囲むようにマリア、田中、桜の三人が椅子に座っている。取立屋は後ろで、本棚の本を一冊ずつ調べたり、高橋の持ち物を片端から調べている。牧師が監督するように取立屋について回る。

桜 私たちはお父さんのことを本当の父親のように思っている、いつもお父さんと呼んでいました。お父さんも、私の名前が「桜」だからお兄ちゃんのことを「寅、寅」と呼んで可愛がってくれて……。

取立屋 (手にした本を振りながら、フシをつけて) 奮闘努力の甲斐もなく……。

桜 あの地震の時、お兄ちゃんはちょうど大学受験。お父ちゃんもお母ちゃんも死んでもたから二人で大阪の叔父さんの所に行ったんです。

田中 (横を向いて) ますます寅さんや。

桜 でもお兄ちゃんは何もかも無くしたことで希望まで無くしてしまって……悪い友達に誘われると、私を残しておじさんの所を飛び出してしまったんです。

マリア 震災で生きる気力を無くした人はたくさんいたわ。

桜 お父ちゃんの残してくれたお金を勝手に持ち出すし、

叔父さんや叔母さんに酷いこと言われて、(マリアに)

私もいつそのこと家を出ようと思ったんだよ。

取立屋 そこはちょっと映画と違うなあ。(と、言いなが

ら本棚に置いてあったサイフと腕時計をポケットに入れようとする)

牧師 主は言われました。お金を勝手に持ち出すのはいけないことです。けれどももつといけないのは盗むことです。妬むことです。人のものを欲しがることです。(言いながらマリヤの持っていた猫のぬいぐるみで取立屋を後ろからポカリと殴る。)

取立屋 (うなだれてサイフと時計を元に戻しながら) 主はまた言われました。宝は地に積むな、天国に積み。持物は全て貧者に分け与えよ。それは自らの宝を天国に積むことである。

桜 そんなお兄ちゃんをお父さんは救ってくれた。私の仕事だってお父さんが見つ付けてくれた。

牧師 高橋さんはこの仮設住宅で暮らしながら、地震で被害にあった人を訪ね歩いて、この人達のように親を無くした人達には就職や受験の相談に乗ったりしていたんだ。そうそう、困った人には無利子でお金を貸して上げたりもしていたようだ。

桜 (取立屋に優しい声で) 無利子でね。だから私は少しでもお父さんのお手伝いをしようと思って一人でここへ越してきたの。お父さんこそは、きっと現代のキリストなんやて思ってた。

取立屋 (泣きながら) ええ話やなあ。美談やなあ。感激やなあ。感動やなあ。困った人に無利子でお金を貸すなんてでけんことやなあ。どこかのサラ金とえらい違いやんけ。

それまで、じつと話を聞いていたマリヤが立ち上がり、舞台中央に出てくる。

マリヤ (桜にむかって) 桜さんはあの人の本当のことを知らないのよ。あの人がどんな人か知らない。あの人が何をしてきたのか知らない。そうよ。貴方たちは何一つあの人のことを分かってはいないわ。

みんなが驚いてマリヤを見る。

マリヤ あの人は私のお母さんを殺したわ。おじいちゃんも、おばあちゃんもあの人に殺されたわ。

取立屋 三人も殺しとんのかい。

マリア おじいちゃんとおばあちゃんが首を括って死んだんは私が十歳の時やった。

取立屋 なんや、それは自殺ちゆうもんやんけ。

マリア おじいちゃんの会社はそのころ倒産寸前で、でも私もお母さんもあの人が助けてくれると信じていた。あの人はおじいちゃんの会社の親会社の社長さんなんやから。

田中 でも、その頃はあの人の会社のほうも倒産寸前になつていたんだ。それで、あの人は生き延びるために小会社を次々に犠牲にしていた。

マリア そうよ。自分の娘の会社でも容赦なく犠牲にしたわ。それでもお母さんはいつかあの人が救ってくれろと信じてたけど、私はあの人を父親なんて思ったことなんか一度だつてない。(桜に)これがあなたの大切なお父さんの正体よ。

マリアが桜をじつと見つめる。桜は椅子から立ち、耳を抑えて舞台の奥に逃げるように駆け込む。

取立屋 あー。悲しい話や。牧師はん。神さんは、キリストはんは何したはりまんねん。牧師 (祈りながら) 主よ。この者たちを救いたまえ。

取立屋 何や。誰を救いはんのか分かれへん。

田中 あの人は自分の事業のために、汚い手を使っていくつもの会社を乗っ取つて、幾人も女をこさえて、しかしそんな人生が許されるはずはないんや。

取立屋 神さんの罰があたつたんやなあ。

田中 (マリアに) あの人はマリアや僕のお母さんの人生を狂わせた酷い男だけど、でも、一番苦しんだのはあの人もかもしれないよ。

牧師 主のしもべ達を迫害せし使徒パウロは、神の声によりて生まれかわりぬ。酋長も、あの震災の中で神の声を聞いたのかも知れない。

田中 僕は今でもあの時のことを夢に見るんや。あの時、僕は仕事で東京にいたんやけど、僕の夢には焼けてしまったアパートの猛火の中で苦しんでいるお母さんと、それから必死になつてお母さんを助けようとしているあの人が出てくるんや。焼跡から発見されたお母さんの遺体は、小さい僕を抱いているあの人の写真を握りしめていた。

桜 お父さんの写真を・・・

田中 (マリアに) あの人は何も言わなかったけど、あの人が一番心を傷めて心配していたのはマリアのことかもしれないよ。震災の後、君の行方だけは長い間わからなかったしね。

桜 マリアさんはお兄ちゃんの不良仲間のリーダー格で、暴走族のマリアと呼ばれていたのよね。

取立屋 なんや、俺より悪やんけ

田中 (マリアに) 僕は、君との約束を守って回りの人には僕たちのことを秘密にしてきた。

牧師 高橋さんは君たちへの償いのためにもこの人たちの酋長になるうとしていたのか。

田中 だけどもういいんやないか。それにあの人には君だけは他の人とは違う、特別なんや。ほら、あの人はいつもクリスマスになると小さなケーキを贈ってきた。僕たちはあの人に今こそ「お父さん」と呼んであげるべきかもしれないよ。

田中が話している間うつむいていたマリアが突然叫ぶように話します。

マリア うちはその人を許さない。あの人はおじいちゃんを殺した。

牧師 あの日、倒れた柱の下敷きになった人を、自分も背中や足から血を流しながら、必死に助け出そうとしていた人がいた。マリア、それが君のお父さんだ。

マリア うちはその人を許さない。あの人はおばあちゃんを殺した。

牧師 私は最初、手をかして一緒に柱の下からケガ人を救い出そうとしたけど二人ではどうにもならないと分かって救護の人を呼びにいった。そして戻ってみるとその人は一人でその大きな柱を持ち上げて、柱の重みに耐えながら人が人を救い出していた。まるで十字架を背負ったキリストのように。マリア、それが君のお父さんだ。

マリア うちはその人を許さない。あの人はお母さんの青春を奪い、お母さんを奪い、そしてお母さんの命までも奪った。

牧師 その人は運びこまれた救護のテントの下で自分も足を折って歩けないのに必死にケガ人に水を与え、包帯をし、看護をして回っていた。マリア、それが君のおとう

さんだ。

マリア（泣きながら、叫ぶように）あの人は私の家族を、私から奪ったんやわ。

マリアが舞台の中央で泣き崩れる。一同は声なく、

しばらくマリアを見ている。

桜が進みでる。

桜 マリアさん。でもお父さんはここで沢山の家族を作ったわ。震災で親や子を無くした人を集めて新しい家族を作った。それは嘘の家族でも、父や母や息子や娘と言いつ合っているうちに本当の家族になれる。お父さんはいつもそう言っていた。だからみんなから酋長と言われていたんじゃない。

取立屋 そうか、嘘でも本当の家族か。それは借金の肩代わりさせられるんかいな。

みんなが取立屋を見る。

玄関で「ごめんください」という声が聞こえる。桜が「はい」といつて出ていく。しばらくして「ごろうさん」という桜の声が聞こえ、四角い箱のようなものを持ってきてテーブルの上におく。

桜 マリアさんのところにきたんですって。マリアさんいないからもって来てくださったの。

牧師が包みをといて、箱をあける。中にはクリスマスケーキが入っている。

牧師 マリア、これは天国のお父さんからプレゼントだよ。お父さんが亡くなる前に注文してくださいだった。

マリアが暫く机の上に置かれたケーキを見つめているが、突然、泣きながら関をきったように言う。

マリア お父さん……。

お父さん、うちはもう二十歳なのよ。もう子供じゃないのよ。それなのに、いつまでもこんなもの贈ってきて……。

(幕)